

付けます。その「さん付け言葉」の深層心理(?)に今週は迫ります。

今週のお題

八坂さん、おいもさん



る気がします。京都には 百合さん(37)は「神社やお寺がたくさんある付け」を挙げられま。私も小学校の入学な た、「ピンクちゃん」とおめでたい時はいつも や「イチゴちゃん」と

生活のなかで物に「さ は「卵は『おたまさん』」を「ますか?」イモは『おいもさん』と

西京区のリフォーム店 経営塚本明美さん(59) 言います。幼い時から染

は即座にいくつか例を挙げられました。「卵は『おたまさん』。『お揚げさん』



みついてい るので不思議に思った

「お豆さん」も言います ません」。京都人には当



ことを「あく、柔らかく包み込むよ うに話す京都独特の感情

感心しました。あもさ んは初耳です。「やっぱ

り身近で親しみがあがるから『さん』を付けたくな

るのでしようか。最近、 こうした言葉を使う人が

減ったように思います。 角が立たず柔らかく、優

しさを感ずる京都人らしい 言葉を私は使い続けた

いと思います。 山科 主婦小松世梨 も「してはる」と敬語

子さん(54)からは「魚 を使う人もいれますよ

のタイを『おタイさん』、 大根を『おだいさん』。

「お釜さん」もあります ね」と返ってきました。

優しい響き、独特の感情

親しみ込めて呼ぶ

うと、長い時間をかけて 自然に身に付いた言葉か もしれませんねえ」と分

析されます。 右京区の無職田井俊三 でお宮さんへ行くほど神様

